

## アンドレ・ジッダの『帰宅』：校訂版作成のための 覚え書

吉井，亮雄  
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/19378>

---

出版情報：文學研究. 89, pp.55-87, 1992-03-25. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# アンドレ・ジッドの『帰宅』

——校訂版作成のための覚え書——

吉 井 亮 雄

小説や批評・日記・自伝といった著作にくらべると、ジッドの演劇作品はあまり知られていない。全8巻の『演劇全集』が出版されているほどで、作品数はむしろ多いともいえるのに、一般読者には劇作家ジッドというイメージは依然として馴染みがうすい。かつては研究者さえも「ジッドと演劇」をすすんで論じようとはせず、このテーマをあつかった単行書としては、それじたい議論の余地を多分に残すジェイムズ・マクラレン『アンドレ・ジッドの演劇』<sup>1)</sup>があるくらいのものであった。しかしながら近年ようやく、ジッドの総体像把握のためには等閑視できない問題として、その重要性が認識されはじめている。とりわけ、ナンシー第2大学のジャン・クロードが多年の研究の成果として大部な国家博士号請求論文を1990年末にリヨン第2大学に提出したが<sup>2)</sup>、これが公刊されれば研究の活性化にいつその拍車がかかるものと期待される。本稿は、作曲家レーモン・ボヌールとの共作を予定されながら未完に終わった作品『帰宅』の校訂版を作成・提示するものだが、以下に述べるように不完全であるにもかかわらず、あえてこれを印刷公表するのは、ジッド演劇の再評価にささやかながらでも貢献できればと願うからにはほかならない。

さて、『帰宅』にかんしては、いわゆる初版・『演劇全集』版という2つの刊本が知られているが、じつはその外にもうひとつ、初版出版に先立ち作者ジッドには内密にごく少数数印刷された「違法刊本」が存在するのである。『あるオペラの断章』（以下『断章』と略記）と題されたこの版については、ジャック・コトナンのジッド書誌が伝聞情報としてその存在を指摘しているだけで<sup>3)</sup>、

詳細は今日にいたるまで一度も論じられていない。だが同版は、ある自筆稿の最終状態を写したもので、初版にたいし少なからぬ異文を含む点で、合法刊本に勝るとも劣らぬ資料的価値を主張しうる。したがって本稿では、これを含めた計3つのテキストの比較にもとづき校訂版を作成・提示するが、それでもやはり資料体の面では大きな不備を残すものにならざるをえない。というのは、違法出版に悪用されたものと同一物か否かは未確認だが、『『帰宅』の自筆稿』が作家の遺産相続人カトリーヌ・ジッド女史の自宅に所有・現蔵されているからである（筆者は『放蕩息子の帰宅』[1907年]の校訂版<sup>4)</sup>を準備中に興味をおぼえ、『断章』のテキストを筆写したが、現存自筆稿そのものは参照するにいたらなかった）。その閲覧にかんしてはすでに女史の同意をえているので、いずれ渡仏の機会をとらえて、『断章』との比較照合をはじめ、紙質・判型や記載テキストについて詳しく調査する予定ではあるが、以上のような事情のため、本稿はあくまでも「決定的」校訂版作成のためのエスキスにとどまる。これに「覚え書」と副題するのもそれゆえとあらかじめ承知されたい。

### 『帰宅』執筆の経緯／作品概要

1899年7月22日——。すでに1と月前からジッドは、母方の別荘があるノルマンディーの小村ラ・ロック・ベニヤールに滞在している。創作に没頭するために、雑事がたえまなくおし寄せる喧噪の首都を離れ、南仏のユゼス（父ポールの故郷）とならんで幼少時からしばしば夏をすごしたこの静かな田舎に籠っているのである。前夜『カンドール王』の第1幕を書き上げた彼は、この日には、さらに自分の意欲をかき立てようと、当地での生活態度と仕事の予定について、つぎのように書き記す。

是が非でも生活をかえなければならぬ。すぐに（ラ・ロックに着くや）努力をはじめ、うまくいった。以後、刺激物はいっさいなし、食事ではワインは一杯だけ。煙草はほんの少しだけ——ほとんど禁煙。なんとしても五感の平静を獲得すること。外

出時は、胸をはって、ふかく呼吸するよう留意。

勤勉に仕事——だが、ひどく困難だ〔…〕。とはいえ他人にじゃまをされることはほとんどなかった。〔…〕

ボヌールのオペラ台本〔『帰宅』〕は急を要しない、なぜなら彼自身がまだ手をつけていないのだから。

小説〔『背徳者』のこと〕、8月。

『カンドール王』の最終部分、8月-9月。

『法王庁の抜け穴』、9月。

『プロセルピナ』、9月。

『ラ・ミヴォア』（のちの『イザベル』）、10月。<sup>5)</sup>

各作品のじっさいの完成年を知るわれわれの目には、仕事のプランそのものはなんとも無謀なものに映るが、しかしなによりもまず、プランの半数を演劇作品（『帰宅』、『カンドール王』、『プロセルピナ』）が占めていることに注意しよう。1908年初頭におこなわれた『カンドール王』ベルリン公演の惨憺たる失敗以後、ジッドが演劇、とりわけ実際の舞台上演にたいしてある種の警戒心を抱きつづけたことはよく知られているが<sup>6)</sup>、この時期にはそういった意識はまだ希薄なのである。むしろ、17世紀の古典主義以来、緒ジャンルのなかで詩とならび演劇を最上位におきつづけたフランス文学の伝統に無関心でありえたはずのないジッドにとっては、劇作家としても認知されることが密かな夢であった、そのように考えてもさほどの的外すことにはなるまい。

話を『帰宅』にしほろう。「ボヌールのオペラ台本は急を要しない」——だがジッドは、こう書きとめて8日後の7月30日には早くも「最初の4分の1」の原稿をボヌールに送っている<sup>7)</sup>。さらに、10月の初めにはボヌールがラ・ロックを来訪するが、おそらくはこの訪問にふたたび創作意欲をかきたてられたのだろう、まもなく「2つの補遺」として、物語の主人公と目されるホラスの長台詞（クプレ）を書き足している<sup>8)</sup>。しかしながら、好調のように見えた筆はそこで止まり、以後はいかなる進捗もない。ボヌールのたびかさなる催促はむ

しろ逆効果にはたらし、ジッドは「恥辱と狂気じみた無謀の記念碑としてそびえ立ち、思考をかき乱すこの不幸な断章」<sup>9)</sup>をまえにして困惑を覚えるばかりという状態がつづいたのである。

ジッドは後年の回想でも、計画が頓挫した原因をボヌールの信奉する美学と彼自身のそれとの根本的な相違に求めているが<sup>10)</sup>、両者がはじめてこの隔たりをはっきりと意識したのは、執筆着手から2年をへた1891年8月のことで、『エルミタージュ』誌の同月号にジッドの「芸術の限界」が発表されたのを直接の契機とする。もともとはアンデパンダン展での講演のために準備されたこのテキストのなかで彼はつぎのように説いたのである。

芸術作品は意志の仕事であります。芸術作品は理性の所作なのです。〔…〕自然界では〔…〕人間は自然に従属していますが、芸術作品では反対に人間が自然を服従させるのです。——「人間が提出し、神が処理する」といわれますが、これは自然界においては本当です。しかし、私が問題にしている対立については、つぎのように約言しようと思います。芸術作品にあつては、逆に「神が提出し、人が処理する」、と。<sup>11)</sup>

ジッドの内部で少なくともすでに数年前から確固たるイメージを結び、また以後もその信条として揺らぐことのなかったこの芸術観の表明にたいし、ボヌールはただちに正反対の主張をジッドに書き送る。8月9日の書簡——

私には、芸術作品が意志の仕事である、理性の所作である、と信じることはできません。傑作がつねに論理的で調和のとれたもの、そう、丘の稜線や花の造形のように論理的で調和のとれたものだとは私も思いますが、しかし同時にまた、それは意志によるものではない、と思うのです……。したがって、私の考えはほぼつぎのようなのだといえるでしょう。つまり、神だけが提出もし、処理もする、ただ彼ひとりが恩寵の偉大な分配者なのだ〔…〕という考えです。<sup>12)</sup>

ことここにいたれば、その後の展開はおのずから早い。3日後、ジッドは手紙

を返し、相手の考え方を尊重する友愛にあふれた表現を重ねながらも、つぎのように結論せざるをえない——「かくして私の額とあなたの額がぶつかりあう、ゆゆしき問題点があるというわけです」<sup>13)</sup>。そして月末にはついに、共作を最終的に断念する旨を作曲家に通知し、「代わりの台本作者」を探そう勧めるのである。<sup>14)</sup>

このように、芸術作品は明晰と意志の結晶たるべしという、しばしば「古典的」と評されるジッドの美学と、刻苦と抑制を排し、自然と本能の躍動に身をゆだねることで、純粋な靈感の定着をめざすボヌールの美学との決定的な乖離によって、計画の流産は当初から予告されていたともいえるだろう。付言するならば、フランシス・ジャムが背後でこの一件に大きな影響をおよぼしていたことも疑えまい。かつてジッドがボヌールを識ったのがこの詩人の仲介によるものだったばかりか、彼と詩人とのあいだには、音楽家とのばあいと同種の芸術上の意見対立が以前から露呈しており、そのことが『帰宅』の中断・放棄と無関係だったとはとうてい思われなからである。じじつ、すでに前年（1900年）には、ジッド宅での会食において、「彼の詩句には曲をつけようがないとボヌールは私に語った」とジャムが発言し、「にがにがしい思いを抱き、〈靈感〉なるものに若干の嫌悪を覚えた」ジッドがこの問題をボヌール自身に知らせるとい一幕があった<sup>15)</sup>。また、ジャム当人とこのあいだの意見対立がそれまでになく深刻な様相を呈するものも、『帰宅』が最終的に放棄された3か月後（11月25日）には完成し、翌1902年5月に出版される『背徳者』の主題をめぐってのことである。<sup>16)</sup>

話は前後するが、クロード・マルタンも推測するように<sup>17)</sup>、『帰宅』の共同制作の手順としては、ボヌールがかなり詳細なプランを用意し、ジッドはそれに沿って執筆を開始したものと思われる。残念ながらこの資料は今日にいたるまで未発見なので、物語の全体像がどのように想定されていたかは推測の域をでないが、実際に書かれた第1幕から判断するかぎり、少なくとも作品の主題にかんしてはすぐれてジッド的なもの、作家の自伝的要素をきわめて濃厚に反

映するものであったことはまちがいない。簡単な内容紹介もかねて、そこに提示されたいくつかのテーマを指摘しておこう。

ホラスは、遠くアスワン（『断章』ではミクロン島）の地で3年をすごしたのち約束どおり、貞淑な妻マルトの待つ田舎の家に帰ってくる。マルトは、別離の夜と「同じ灰色のドレスと同じ想いで」彼をむかえる。しかしホラスの目には、ひさしぶりの家はかならずしもかつてと同じには映らない――

いや、なにもかもまったく同じはまだよ、君だって同じはまだ。

でもぼくの目は同じまじじゃないようだ。

居間がこんなに小さいとは思わなかった……。

「長いあいだ酔いしれていたおとぎ話のような夢から目覚め」、ふたたび「平安が魅せられた心のうえにおりてきた」ことを喜びながらも、そこには漠然とした不安が、もはや以前のような2人の関係を許さない不安が隠されている――「この旅でぼくは粗野で荒々しくなってしまったのじゃないだろうか」。そしてじっさい、雨中の帰宅のせいで額に熱をもったホラスを案じながら、旅先では熱病にかかることはなかったかと問うマルトにたいして、彼の返答は無邪気だが、それだけによけい残酷なものとなる――

アスワンで熱病だって!? 君には分かっているんだ!

あれほど健康な土地はない。

どんな病気も癒ってしまう、空はいつも晴れて、

冬を感じることもほとんどない。

あちらにいるときほど元気だったことは一度もない。

ぼくは太陽をおいてきた、ここにあるのは雨だ。

ここではぼくは病気になってしまう……

家庭の閉塞を嫌い、灼熱の太陽を求めて、たえまなく出立と帰宅をくりかえし

たジッドと、いつも地味な衣服に身を包み、パリにはめったに姿を見せず、雨の多いノルマンディーのキュベルヴィルで彼の帰りを待った控えめなマドレーヌとの関係をここに見ないものはあるまい。ホラスのなにげないことばに潜む残酷さも、ジッド自身の公認されえない欲望のカタルシスという点で、少年との戯れのために凶らずも妻を見殺しにする『背徳者』の主人公ミシェルの残酷さと共鳴し、通底しているのである。

ドラマの展開をうながすモビールという面で、ホラスとマルトのあいだに生じた微妙な亀裂に劣らず注目すべきは、マルトの妹ルシールの存在とそれが夫妻の関係に投げかける不安な影であろう。「愛らしさにあふれる、若い笑い声」をもつ彼女は、万事に積極的で、ホラスとの再会が「いたって簡素で、静かな、意表をつくのはなにもない」ようにと願うマルトにたいしても自分の考えを隠さなかった――

あら、私だったら夫を待つのに  
もっと華やいだドレスにするとするわ。  
なにもかも変えてしまうの、お顔も、髪も。  
私の心と眼差しに昨日の忘却を読みとって、  
彼は新妻に会うような気がするでしょう。  
そして、愛にあふれて、ずっと若々しい陽気な声でいうのよ  
ああ！ 妻がこんなにも美しいとは知らなかった！

だが、この勧めはむしろマルトの心を深く沈ませる――「でも、そんなことができるほど／私はもう若くなければ／美しくもない、私があの一とにできるのは／ただ貞節であることだけ」。ルシールの存在が物語全体の構想において小さからぬ位置を占めていたと推測されるのは、単にマルトとの性格の違いや年齢差のためばかりではない。ホラスがじっさいに帰宅すると、それまでの陽気さとは打って変わり、泣きながら2階に駆け上ってしまう彼女の態度に、秘められた愛情の暗示、あるいはある種の共犯関係のそれを読めなくはないからで



ある。ホラスのほうはとくにこれを意識している様子は見せないが、それでも第1幕の終わりでは、彼が義妹のためにアスワンから「狭い籠に入れて、島に棲む黄と黒の小さなリス」を送っていたことが、彼女だけに「小声で」告げられる……。描写はあくまでもほのめかしの段階にとどまってはいるが、ホラスとマルトの関係がジッドの自伝的要素のほとんど忠実な転移であることを思えば、ルシールについても実在の人物の反映を求めることは根拠のないことではあるまい。というのは、マドレーヌの妹のひとりヴァランティーヌが、ルシールのように、姉とは対照的に活発で、しばしば衝動的な言動をとったことで知られているからである。彼女をモデルにした、きわめて実話性の高い物語『マネ・テケル・ファレス』で、主人公にやはりルシールという名前が与えられていることも単なる偶然とは思われない<sup>18)</sup>。また、これに類似する3者関係の転移として、『狭き門』（1909年）のアリサ、ジェローム、そしてアリサの妹ジュリエットのそれを思い浮かべるならば、なおさらルシールという登場人物の生成に作家の自伝的要素が大きく介在したことは疑えまい。

以上のように、ジッドとマドレーヌの両義的な夫婦関係が物語の自伝的な枠組みの中心におかれている点で、『帰宅』はあきらかに『背徳者』や『狭き門』の系列に位置づけられる作品である。しかしながら、第1幕の〈帰宅〉は新たな〈出立〉の準備・前提にすぎない、と第2幕以降の内容をあえて推測するならば、『帰宅』が、そのありうべき弁証法的展開においてすでに、少年たちを主人公とするいくつかの作品——末弟の新たな旅立ちによって救済への期待が美しく素描される『放蕩息子の帰宅』や、ジェネレーション・ギャップの問題を背景に、はるかに大きな時空の広がりの中かで〈閉塞〉と〈解放〉の対立を描く『法王庁の抜け穴』（1914年）および『贖金つかい』（1926年）——を予告するものであったともいえるのではあるまいか。

たしかに、冒頭部のみで執筆を放棄された『帰宅』は、関連情報に乏しいという事情もあいまって、挿話的な価値しかもたない作品と見なされ、今日まで本格的な論議の対象になったこともない。しかしながら、ジッドが自らのポジ

ションを測るために他者、とりわけ意見の異なる他者をつねに必要としたことは、ポヌール宛書簡にも述べられているとおりである<sup>19</sup>。この意味で『帰宅』は、未完に終わったというまさにその点において、作家の芸術上の信念を逆の面からさらに確固たるものにし、途中数年にわたる執筆不能時期をはさみながらも、『狭き門』以降の豊かで着実な創作活動を準備するのになにがしかの貢献をした、そう推し量るならば、この小品にあまりにも過大な評価をくだすことになるのだろうか。

### 暫定的校訂版の作成と提示

すでに本稿の冒頭でことわったように、後掲する『帰宅』の校訂版はあくまでも暫定的なものであって、現存自筆稿そのものを参照していない現時点では完璧なものからはほど遠い。しかしながら、少なくとも『断章』がジッドのある自筆稿にもとづいて印刷されたこと、しかも、今日にいたるまでジッド研究者がこの事実についてなんら具体的な指摘・検討をおこなっていないことを思えば、『帰宅』初版・第2版にたいして『断章』のテキストが見せる異同をここに紹介することは、たとえそれが細部的なものであるとしても、けっして無意味なことではあるまい。以下、校訂版提示に先立ち、計3種類の刊本について、出版の経緯を中心に若干の補説をおこなう。

まず『断章』——。ジョアノ紙をもちいて印刷された大版8折サイズ。仮綴はされず、各紙片バラバラの状態である。これは、刊本自体が薄いせいもあるが、装丁の便（仮綴を解く手間をはぶき、またその作業のさいの損傷の危険をふせぐ）のためにしばしば贅沢版で採られる方法。タイトル・ページにつづいて、「本巻は、作者の了解をえずに正真正銘7部のみ刷られたもので、アンドレ・ジッドの未発表原稿のテキストを写すものなり。1946年8月刷了」と、部数表示とともに、わざわざ違法出版である旨が記されている。なお、筆者がテキスト筆写のために参照したのはパリ国立図書館貴重本室に現蔵の第6番刊本で、背粒起革の比較的簡素な装丁に収められている。本文テキストは頁付な

しの16頁、価格表示はむろんない。その違法性にたいする配慮のためか、筆者の知るかぎり、この刊本が作家の存命中にフランス国内の競売やパリの有名古書店のカタログに公にあらわれたことは一度もない。また、1969-70年に生誕百年を記念してパリやブリュッセルなどで開催された大規模なジッド展のいずれにも出品されなかった。しかしながら、作家の没後3年目にあたる1954年におこなわれたミシェル・ボロレ旧蔵コレクションの売り立てには早くも登場しており、蒐集家たちからは垂涎のアイテムとして密かに注目を集めていたものと思われる。また、この事情から見て、最初は関係者によって少数の著名蒐集家のもとに直接商談がもちこまれたのではないかと推測される。ちなみに、ボロレ・コレクションの競売カタログは『断章』の印刷・発行地を「パリ」と補足しているが<sup>20)</sup>、なんらかの実証的根拠にもとづいた注記か否かは不明（あるいは蒐集家がこの刊本を入手のさいに出版の経緯を知らされていたという可能性も考えられなくはない）。作家自身が生前この一件を知っていたか否かも不明である。印刷のためにもちいられた「未発表原稿」にかんしては、誤植によるものとは思われないジッド特有の正書法上の誤りや、記述の不整合（たとえば、副次的な登場人物「祖父」が数か所で「老人」と記される）、完成度の低い草稿においてしばしば認められる書き癖の兆候（たとえば、句読点の欠如や、あきらかにその代用としてのダッシュ）など、諸点から判断して、1899年当時のものであることは確実である。また、ボヌールに送られた原稿が、これを整えた清書稿ないしタイプ稿であったこともほぼ疑えまい。ただし、これがカトリーヌ・ジッド女史所有の現存自筆稿と同一物かどうかについては、すでに述べたように未確認である。

違法出版の2か月後には、ヌーシャテルに本拠をおくイド・エ・カランドから『帰宅』の初版が、同年6月執筆の回想記「レーモン・ボヌール」とボヌール宛書簡69通（1898-1938年）を付して公刊されている（付言すれば、時期的にちょうど重なっていることから見て、自筆稿が悪用されたのはこの初版出版計画と無関係であったは考えにくい）。リシャル・エイ（ドイツ語読みリヒャ

ルト・ハイト）が友人フレート・ウーラーとともに興したイド・エ・カランドは、すぐれた印刷・造本のゆえに晩年のジッドがとりわけ最良にした出版社で、ここからは『帰宅』の前年には『青春』が、また翌年以降は『テーゼ』第2版、『ポエティック』、『序言集』、『交遊録』、『エロージュ』や『演劇全集』全8巻、マドレーヌとの関係を赤裸々に綴った『今や彼女は女のなかにあり』の私家版などが、わずか数年のあいだにたてつづけに上梓されている。この間ジッドは、エイと職業上の肩書をこえた親交をむすび、46年と翌47年の2度にわたってヌーシャテルを訪れ、彼の自宅に長逗留をしているほどである。『断章』からこの『帰宅』初版への変更（おそらくは、1899年の執筆当時すでにほどこされていた変更）は、前述の不備・不整合の訂正をのぞけば、ほとんどが句読法を中心に文体上や韻律上の要請によるものであって、それ自体は関心に値するものが少なくないが、物語の主題提示に大きな影響をあたえるような修正はこれとって見あたらない。なお、ウージェーヌ・キャリエールのエッチングによるボヌールの肖像が巻頭を飾っている。

エイが後に証言するところでは、第2版として『帰宅』が再録された『演劇全集』の計画はもとをたどれば彼の発案によるものだった。そのときの2人のやりとりは、ジッドの演劇観や、観客・大衆にたいする屈折した感情を伝えるものとしても興味ぶかいので、長くはなるがあえて訳出・引用しよう。

ある朝、朝食をとりながら——朝食の時間がジッドとの議論には適していた——私は彼に、わざとなげない調子で、あなたの演劇について話してもらえないか、あなたの作品のなかで演劇をどのように位置づけているのかを教えてくださいませんかとのんだ。しばしの沈黙があったので、この頼みが彼の痛いところをついたことがわかった。だがジッドは、いかにその演劇作品に心血を注ぎ込んだかを語ってくれた。数か月におよぶ、さらに多くは数年におよぶ、構想とさまざまな躊躇の期間〔…〕。彼の作品はほとんど上演されていた。だが、たいていは回数も極度に少なく、前衛劇団か素人集団によるものだった〔…〕。結局のところ、彼の演劇作品は大劇場の観衆を獲得することはなかったのだ。そして、彼はそのことにたいして苦い思いを抱いていた。

彼が私にしてくれていた長い答えがほぼそんなところまできたとき、彼は急に話を切って、私にいった。「そのあとは、ええい、いまいい、だ！ いつものことだが、大衆というのはあとにならなければ理解しないものだ。ところで、あなたはどうかこんな質問をしたのかね」——私は答えた「[...] あなたの『演劇全集』を出版できたらと思っているので」。私は断言しようと思うが——そしてその後の手紙のやりとりがそれを証明しているが——この示唆がジッドにひじょうに大きな喜びをもたらしたといえると思う。

われわれはほとんどすぐに仕事にとりかかった。<sup>21)</sup>

エイの証言にはいつのことかは記されていないが、この話し合いがもたれたのは、ジッドが『帰宅』初版の上梓を間近にひかえてヌーシャテルに滞在していた1946年8月末から9月半ば以外には考えられない。じじつ、時を移さず『演劇全集』の準備が開始されたことを裏づける「その後の手紙のやりとり」も存在する。エイは全集の各巻に注解をつけることになるのだが、ちょうどこの時期からジッドが注解執筆に必要な情報を彼に送りはじめていたのである。たとえば、同年10月31日には『放蕩息子の帰宅』を全集に収録するか否かという問いにたいする返事<sup>22)</sup>、また11月18日には私設秘書イヴォンヌ・ダヴェの協力をえて作成した詳細な「ジッド演劇作品のリスト」を送っている<sup>23)</sup>。計画発案の時期と以後の経緯を考慮に入れるならば、ジッドがエイの提案に即座に同意したのは、『帰宅』初版の出版によって演劇への関心をすでにいくぶんか呼び覚まされていたためではないかとも思われる。ところで、ジッド自身の準備作業についてエイは、「各作品は執筆年代にしたがって順次ジッドの見直しをうけた。彼がほんの少ししか修正をほどこさなかったものもあれば、大幅に手直しするものもあった。この仕事は数か月におよんだ。というのは、劇作家アンドレ・ジッドはこの機会をとらえて、自身の演劇作品の決定版を作ろうとしていたからである」<sup>24)</sup>、そう語っているが、第2巻(1947年10月刷了)収録の『帰宅』第2版テキストにかんしては、修正作業はあきらかに証言中の前者に属す

るもので、約10か所の細部的な改変にとどまる。1年前に公開された初版テキストの踏襲がジッドの基本方針であったことは疑えない。なお、モーリス・ブリアンションによる多色刷石版画がテキスト冒頭を飾る。

以上、違法出版も含めた全刊本について補説したが、備忘として、略号とともに各版にかんするごく簡略な書誌学的記述を示す。

*FO*: André GIDE, *Fragment d'un opéra*. s.l. [Paris ?], 1946. In-8° en feuilles (1 f. blanc, faux-titre, titre, 16 pp. non numér., 1 f. recto blanc, ach. d'impr. au verso), couv. beige rempliée. Ach. d'impr.: août 1946. Au verso de la page de titre on lit cette note imprimée au-dessus de la justification: "Ce volume, tiré à l'insu de l'auteur à sept exemplaires en tout et pour tout, reproduit le texte d'un manuscrit inédit d'André Gide". Édition subreptice.

*Éd.O*: André GIDE, *Le Retour*. Neuchâtel et Paris: Ides et Calendes, 1946. Portrait de Raymond Bonheur par Eugène CARRIÈRE en frontispice. Un vol. broché de 121 pp., couv. blanche rempliée. Ach. d'impr.: 15 octobre 1946 (Impr. Centrale, Lausanne). Le texte du *Retour* occupe les pp. 17-36.

*ThC*: *Le Retour*, repris dans le tome II du *Théâtre complet de André Gide*. Lithographies de Maurice BRIANCHON. [Notices de Richard HEYD.] Neuchâtel et Paris: Ides et Calendes, [juillet 1947-juin 1949]. Un vol. broché de 185 pp., couv. blanche rempliée. Ach. d'impr.: 13 octobre 1947 (Paul Attinger, Neuchâtel). Le texte du *Retour* aux pp. 7-26.

これら3つの版のうち、校訂本文として掲げる「底本」にはイド・エ・カランド版初版 *Éd.O* のテキストを使用する。作家自身が校閲した最後の版という点では『演劇全集』版の採用という選択もあったが、本版においては、『断章』の印刷にもちいられた自筆稿の最終状態がどのような修正をへて公開テキストにいたったのかを視覚的により容易に把握できることを優先した。異文は

脚注のかたちで示す。レフェランスのないものはすべて『断章』の異文であり、『演劇全集』版のそれについては *ThC* の略号をおいてこれと区別するが、両版の異文が同一脚注にあらわれるばあいには、前者の略号 *FO* も併記する。筆者の補注によって異文の提示に代えるばあいは、すべて [ ] 内に日本語で表記する。なお、登場人物名の次行にあるト書が、『断章』ではしばしば改行されず、パーレンに入れて示されるが、いたずらに脚注の数を増やすことになるので、本版ではこれを前者と同一視し、異文として採らなかった。また、登場人物の台詞（歌詞）にかんしては、本文テキスト左端に通し行数番号を5行ごとにイタリックで打ち、参照の便を図った。

## 註

- 1) James C. McLAREN, *The Theatre of André Gide. Evolution of a Moral Philosopher*, Baltimore : The Johns Hopkins Press, 1953.
- 2) Jean CLAUDE, *André Gide et le Théâtre*, thèse d'État soutenue en décembre 1990 à l'Université de Lyon II (à paraître aux Éd. Gallimard, coll. "Cahiers André Gide").
- 3) Voir Jacques COTNAM, *Bibliographie chronologique de l'Œuvre d'André Gide (1889-1973)*, Boston : G.K. Hall & C°, 1974, p. 274-275, item n° 783.
- 4) André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*. Édition critique établie et présentée par Akio YOSHII, Fukuoka : Kyushu University Press, 1992.
- 5) GIDE, *De me ipse [sic] et aliis*, dossier de notes fragmentairement reproduit par Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide. De "Paludes" à "L'Immoraliste" (1895-1902)* [abrégée ensuite : *MAT*], Paris : Klincksieck, 1977, pp. 387-388.
- 6) À ce sujet, voir notamment Claude MARTIN, "Gide 1907 ou Galatée s'apprivoise", *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 70<sup>e</sup> année, n° 2, mars-avril 1970, pp. 196-208.
- 7) Voir la lettre à Raymond Bonheur, "La Roque Baignard, [30 juillet 1899]", reproduite dans *Le Retour [Éd.O]*, Neuchâtel et Paris : Ides et Calendes, 1946, p. 49.
- 8) Voir la lettre au même, "Lamalou-le-Haut, [19 octobre 1899]", *ibid.*,

p. 51. Mais dans le texte du *Retour* [FO, *Éd.O, ThC*], on ne lit qu'une seule longue tirade d'Horace (voir *MAT*, p. 390, note 70)...

- 9) Lettre au même, "Cuverville, 10 mai [1903]", *ibid.*, p. 75.
- 10) Voir GIDE, "Raymond Bonheur", *ibid.*, pp. 11-16.
- 11) GIDE, "Les Limites de l'Art" (*L'Ermitage*, n° d'août 1901), texte repris dans les *Prétextes* (éd. 1963), Paris : Mercure de France, p. 26.
- 12) Lettre de Bonheur, "Magny-les-Hameaux, [9 août 1901]", *MAT*, p. 392.
- 13) Lettre à Bonheur, "Cuverville, [12 août 1901]", *Le Retour*, p. 65.
- 14) Lettre au même, "Cuverville, 30 août [1901]", *ibid.*, p. 67.
- 15) Voir la lettre au même, "Lamalou-le-Haut, 24 octobre [1990]", faussement datée de 1899 dans *Le Retour*, p. 53.
- 16) À ce sujet, voir notre "Introduction" à l'édition critique du *Retour de l'Enfant prodigue*, op. cit., pp. 36-40.
- 17) Voir *MAT*, p. 391.
- 18) Voir GIDE, *Manè Teckel Pharès*, texte reproduit par Claude MARTIN, *MAT*, pp. 585-594.
- 19) Voir la lettre du 12 août 1901, déjà mentionnée dans la note 13.
- 20) Voir le catalogue *Œuvres de André Gide provenant de la bibliothèque Michel Bolloré* [vente du jeudi 11 février 1954], Paris : Georges Blaizot, 1954, item n° 91.
- 21) Richard HEYD, "André Gide dramaturge", *Revue de Belles-Lettres*, vol. LXXVII, n° 6, novembre-décembre 1952 [parution mars 1953], p. 10.
- 22) Voir la lettre à Heyd, du 31 octobre 1946, reproduite dans la *Circulaire* n° 33 du Cercle André Gide, Bruxelles, 20 novembre 1963.
- 23) Pour les détails de cette liste inédite, voir notre édition critique du *Retour de l'Enfant prodigue*, op. cit., pp. 199-202.
- 24) HEYD, *art. citée*, pp. 10-11.





ANDRÉ GIDE

*LE RETOUR*<sup>1</sup>

---

1. FRAGMENT D'UN OPÉRA [このタイトル, おそらくはジッドによるものにあらず]

ACTE PREMIER<sup>2</sup>

SCÈNE PREMIÈRE<sup>3</sup>

LE GRAND-PÈRE, LUCILE, MARTHE.

*Ue vieux salon provincial; au soir; Marthe et Lucile brodent sous la lampe. Des fleurs de printemps<sup>4</sup> sont dans des vases sur une console et sur la table. Dehors pluie et vent. Au fond à gauche une fenêtre; à droite une porte vitrée donnant sur un perron. Au bout d'un instant Marthe se lève<sup>5</sup>, va vers la fenêtre, soulève le rideau et regarde, le front contre la vitre.*

LE GRAND-PÈRE<sup>6</sup>

Eh bien ?

MARTHE

Non ; rien encor<sup>7</sup>.

LUCILE

Quel temps fait-il ?

MARTHE

Il pleut.

LE GRAND-PÈRE<sup>8</sup>

<sup>5</sup> Le mauvais temps, sans doute<sup>9</sup>

---

2. [この記述欠如]

3. FO, ThC : SCÈNE I

4. *sous la lampe. Le vieillard songe. — Des fleurs de printemps*

5. *Dehors pluie et vent. — Au fond, à gauche, une fenêtre; à droite, une porte vitrée donnant sur un perron. — Au bout d'un instant, Marthe se lève*

6. LE VIEILLARD

7. encore

8. LE VIEILLARD

9. sans doute, [ここに改行なし, 後続は小文字で開始]

L'a retardé; la pluie a raviné les routes.

MARTHE

N'importe...

LE GRAND-PÈRE<sup>10</sup>

Il se fait tard.

MARTHE

Rien ne l'empêchera de revenir ce soir.

<sup>10</sup> Il l'a promis...

LUCILE

*éclatant de rire*

Ah! ah! ah! ah! quelle assurance!

Tu crois à sa promesse après trois ans d'absence?

MARTHE

Après trois ans j'y crois autant qu'au premier jour.

Ma confiance en lui rassure mon amour<sup>11</sup>.

<sup>15</sup> Sa promesse chantait durant ma solitude<sup>12</sup>.

Je l'entends; je la sens; il me la dit toujours.

Ce n'est pas de l'espoir mais<sup>13</sup> de la certitude.

J'attends depuis trois ans... O! belle heure attendue!

Qu'importe ta lenteur, te voici donc venue!

<sup>20</sup> Cher époux! Maintenant<sup>14</sup> il semble à mon amour

Que ces trois ans d'attente ont passé comme un jour.

Mon âme est un oiseau qu'une aube d'or éveille.

LUCILE

Comme tu parles bien!

LE GRAND-PÈRE

Ne te moque pas d'elle.

---

10. LE VIEILLARD

11. mon amour,

12. ma solitude,

13. de l'espoir, mais.

14. Cher époux! — Maintenant

25 J'aime ton jeune rire où la grâce ruiselle ;  
Il émeut de son chant ma maison et mon cœur,  
Mais parfois la joie est cruelle<sup>15</sup>,  
Le rire peut blesser.  
Respecte son bonheur et son amour fidèle:

30 Ta sœur est ton aînée.  
Sa confiance simple et jamais alarmée  
Rassure et refléurit mes dernières années.  
Marthe, ma chère enfant<sup>16</sup>.

LUCILE

*un peu mutinement*

Pardon, Marthe ma sœur<sup>17</sup> !

*elle tend son front à Marthe qui l'embrasse  
puis vers le grand-père qui lui touche la joue de la main  
avec une grande révérence<sup>18</sup>*

35 Pardon, grand-père !

*ournée vers Marthe<sup>19</sup>*

Alors... ce soir ?...

MARTHE

Ce soir.

LUCILE

Pour fêter ce revoir

Quelle sombre robe as-tu mise !

MARTHE

40 C'est celle que j'avais le soir de nos adieux.

---

15. [ここに句読点なし]

16. 31-33 : - Marthe, ma chère enfant (*il l'attire et l'embrasse*). / J'aime entendre égayer mes dernières années / Ta confiance simple et jamais alarmée.

17. Pardon, Marthe, ma sœur !

18. *Elle tend son front à Marthe qui l'embrasse, puis vers le grand-père qui lui touche la joue de la main, avec une grande révérence :*

19. *Tournée vers Marthe :*

Depuis, je ne l'ai pas remise.

Il la reconnaîtra ; le revoir que je veux

C'est un revoir très simple, et calme<sup>20</sup> et sans surprise.

LUCILE

Es-tu sûre que ce soit le revoir qu'il désire ?

MARTHE

45 C'est ainsi qu'il m'aimait<sup>21</sup>...

Il me retrouvera comme il m'avait laissée<sup>22</sup>

Avec la même robe et la même pensée

Et quand il me dira : qu'as-tu fait<sup>23</sup>

Durant ce temps si long d'absence, mon amie ?

50 Je dirai : cher époux<sup>24</sup>, j'attendais

Pour vivre de nouveau, car vous êtes ma vie.

LUCILE

Eh bien moi pour l'attendre<sup>25</sup>,

Je crois que je mettrais une robe plus tendre<sup>26</sup>.

Je changerais de tout, de front et de cheveux.

55 Lisant l'oubli d'hier dans mon cœur et mes yeux<sup>27</sup>,

Il croirait retrouver une femme nouvelle

Et dirait, plein d'amour plus jeune<sup>28</sup> et plus joyeux :

Ah ! je ne savais plus qu'elle était aussi belle !

MARTHE

*très tristement*

Mais, pour de tels jeux je ne suis<sup>29</sup>

---

20. C'est un revoir très calme

21. m'aimait... -

22. laissée.

23. me dira : Qu'as-tu fait

24. Je dirai : Cher époux,

25. Et bien moi, pour l'attendre

26. [ここに句読点なし]

27. mes yeux.

28. plein d'amour, plus jeune

29. [ここに改行なし, 後続は小文字で開始]

Plus assez jeune

Ni belle et pour lui je ne puis<sup>30</sup>

Qu'être fidèle.

LUCILE

Eh, quoi ! Marthe, t'ai-je peinée<sup>31</sup> ?

MARTHE

Non, mais je suis ta sœur aînée.

LE GRAND-PÈRE

*qui durant toute la scène s'est approché de la fenêtre et surveille*

65 Je crois que je l'entends<sup>32</sup>.

LUCILE

*très excitée*

C'est lui ! C'est lui ! C'est lui<sup>33</sup> !

*Marthe a bondi vers la véranda<sup>34</sup> ; le vieillard la suit.*

MARTHE

Lucile ! viens-tu...

LUCILE

J'arrive...

*elle reste seule derrière les autres*

*bruits dans la cour*

*elle essaye des fleurs devant une glace<sup>35</sup>*

Une rose<sup>36</sup> ?

*elle la jette<sup>37</sup>*

Un œillet ?<sup>38</sup>

30. [ここに改行なし，後続は小文字で開始]

31. Eh ! quoi ? Marthe ! t'ai-je peinée ?

32. l'entends !

33. C'est lui ! C'est lui !

34. FO, ThC : véranda

35. *Elle reste seule derrière les autres ; bruits dans la cour. Elle essaye des fleurs devant une glace.*

36. Une rose ?...

37. *Elle la jette.*

38. [この行および次行ト書欠如]

*elle le jette*  
Des primevères<sup>39</sup>.  
*elle s'en pare*<sup>40</sup>  
Pauvre Marthe !... C'est mal<sup>41</sup> !  
*elle se penche à la fenêtre*<sup>42</sup>  
Je verrai bien s'il l'aime...  
*après les avoir vus*  
Ah ! tendrement<sup>43</sup>...  
*Elle sanglote et s'enfuit*<sup>44</sup>.

### SCÈNE DEUXIÈME<sup>45</sup>

LA SERVANTE, HORACE, MARTHE, LE GRAND-PÈRE<sup>46</sup>.

*Entrent la servante portant la valise d'Horace, puis Horace au bras de Marthe, puis le grand-père*<sup>47</sup>.

MARTHE  
*à la servante*

75 Va préparer le thé.

*à Horace*<sup>48</sup>

Tu dois être transi !

Mon ami ! mon ami ! te sens-tu bien, ici<sup>49</sup> ?

---

39. Des primevères ?

40. *Elle s'empare.*

41. Pauvre Marthe ! ...c'est mal !

42. *Elle se penche à la fenêtre.*

43. Je verrai bien s'il l'aime... Ah ! tendrement...

44. *Elle sanglote.*

45. FO, ThC : SCÈNE II

46. HORACE, MARTHE, puis LE VIEILLARD.

47. *Entrent : la servante portant la valise d'Horace, puis Horace au bras de Marthe de Marthe ; puis le vieillard.*

48. *à Horace :*

49. Mon ami ! mon ami ! Te sens-tu bien ici ?



HORACE

*laissant rouler sa tête sur l'épaule de Marthe*

O ! Marthe<sup>50</sup> ! mon amour... mon cœur fond.

MARTHE

Tu n'as pas eu froid ?

HORACE

80

Non ! mais j'apporte l'ondée.

Vois ! mon chapeau ruisselle.

MARTHE

*touchant son manteau*

Et ta cape est trempée.

*Horace se dépouille en riant. Le grand-père<sup>51</sup> prend les vêtements.*

LE GRAND-PÈRE<sup>52</sup>

*à la servante qui est rentrée et dispose une table pour le thé*

Rose, fais-les sécher au feu de la cuisine.

*Rose sort.*

MARTHE

Tu dois être épuisé<sup>53</sup>.

*Ils s'approchent de la lampe. Le grand-père<sup>54</sup> la soulève pour éclairer le visage d'Horace.*

LE GRAND-PÈRE<sup>55</sup>

*un peu sommairement*

85

Il a très bonne mine.

MARTHE

*le faisant s'asseoir près d'elle sur un canapé long*

Viens près de moi... tout près, cher mari retrouvé<sup>56</sup> !

---

50. O Marthe !

51. Le vieillard

52. LE VIEILLARD

53. épuisé...

54. Le vieillard

55. LE VIEILLARD

56. tout près — cher mari retrouvé !

T'y reconnais-tu bien ? Trouves-tu<sup>57</sup> rien changé ?

HORACE

Non ! Tout est demeuré bien pareil – et toi même<sup>58</sup>.

*il regarde longuement autour de lui*

*Marthe suit anxieusement son regard<sup>59</sup>*

Mais je crois que mon œil n'est pas resté le même<sup>60</sup>

90 Et je ne croyais pas<sup>61</sup> le salon si petit...

MARTHE

*d'abord un peu tristement étonnée*

Petit !

*elle se reprend, et très doucement<sup>62</sup>*

Quand nous étions enfants, t'en souviens-tu ?<sup>63</sup>

Le soir, il paraissait énorme...

HORACE

Je me souviens de tout, ô<sup>64</sup> Marthe bien-aimée !

95 ... Mon front sur ton épaule a retrouvé sa place

Et le doux souvenir de ta chaleur...

MARTHE

Horace !

Tu ne t'en iras plus, n'est-ce pas ?

HORACE

*en riant*

Vous entendez ce que dit Marthe ! Grand-papa !

100 Au diable le commerce et le voyage !

Je suis comme vaisseau qu'a fatigué l'orage<sup>65</sup>

57. bien ? – Trouves-tu

58. [ここに句読点なし]

59. *Il regarde longuement autour de lui. / Marthe suit anxieusement son regard.*

60. le même.

61. Je ne revoyais pas

62. *Elle se reprend, et très doucement :*

63. [ここに改行なし, 後続は小文字で開始]

64. de tout, – ô

65. l'orage.

*il laisse retomber sa tête sur le sein de Marthe*<sup>66</sup>  
Voici mon port !

MARTHE

*touchant de sa main le front d'Horace*

Comme ton front est chaud !

Tu n'as pas pris la fièvre, au moins, là-bas ?

HORACE

105 La fièvre à Assouan<sup>67</sup> !? Mais tu n'y songes pas !

Il n'est pas de terre plus saine.

On y guérit de tout ; le ciel est toujours beau ;

Et l'on y sent l'hiver à peine.

Jamais je ne me suis mieux porté que là-bas.

110 J'ai laissé le soleil ; je trouve ici la pluie.

C'est ici que je vais tomber malade...

MARTHE

Oh ! ne dis pas cela ! Malade ?... près de moi<sup>68</sup> !

HORACE

Parbleu non !

LE GRAND-PÈRE<sup>69</sup>

Et tout va bien, là-bas ?

HORACE

115 À merveille ! à merveille<sup>70</sup> !

La sucrerie s'étend ; les récoltes sont bonnes.

Le comptoir s'établit ; je suis content des hommes ;

J'étais fort amusé de m'y faire obéir.

Que de travail ! à peine y pouvait-on suffire<sup>71</sup> !

---

66. *Il laisse retomber sa tête sur le sein de Marthe.*

67. La fièvre à Miquelon !?

68. cela ! Malade... ? Près de moi !

69. LE VIEILLARD

70. À merveille, à merveille !

71. à peine y pouvais-je suffire !

120 Je partais à cheval tous les jours, dès l'aurore<sup>72</sup>.

Parfois je rentrais qu'à la nuit<sup>73</sup>...

MARTHE

Pauvre ami !

Quel calme reposant<sup>74</sup> tu vas trouver ici !

Et quel tranquille oubli de ta pénible vie...

HORACE

125 Pénible ? – Je l'aimais...

N'est-il pas merveilleux<sup>75</sup>

Que, parti délicat, inquiet, tourmenté<sup>76</sup>,

Je revienne aguerr<sup>77</sup>, plein d'âme et de santé !

N'ai-je pas l'air plus fort, dis ?<sup>78</sup> ... Où donc est Lucile ?

130 Je pensais la trouver ici<sup>79</sup>?...

Elle n'est plus au couvent, n'est-ce pas ?

MARTHE

Non ; plus depuis deux mois.

*à la servante qui apporte le thé<sup>80</sup>*

Rose, tu ne sais pas où peut être Lucile ?

LA SERVANTE

Mademoiselle est montée en pleurant dans sa chambre.

LE GRAND-PÈRE<sup>81</sup> ET MARTHE

135 En pleurant<sup>82</sup> !

---

72. dès l'aurore,

73. qu'à la nuit, harassé !

74. Quel repos

75. C'est une belle chose

76. inquiet, ennuyé,

77. Je revienne guéri,

78. [ここで改行]

79. ici...?

80. *À la servante qui apporte le thé :*

81. LE VIEILLARD

82. En pleurant !!

HORACE

Qu'a-t-elle ?

MARTHE

Oh ! rien sans doute<sup>83</sup>.

Mais ton retour la trouble et l'a mise en déroute<sup>84</sup>.

LE GRAND-PÈRE

Cette petite enfant a peur de toi, peut-être<sup>85</sup>.

140 Elle croit que tu viens pour enlever sa sœur.

Ici, jusqu'à présent, elle a vécu sans maître ;

Nous sommes tous un peu comme ses serviteurs.

Marthe surtout la gâte ; et<sup>86</sup> c'est notre bonheur

De la voir rire ; mais<sup>87</sup> elle est délicate encore ;

145 Tu vois : pour<sup>88</sup> un rien elle pleure.

Nous l'aimons un peu trop ; et elle le sent, j'en ai peur.

Depuis sa maladie<sup>89</sup> et nos craintes mortelles

Chacun, dans la maison, ne vit plus que pour elle<sup>90</sup>.

HORACE

Et j'arrive en épouvantail... Pauvre petite<sup>91</sup> !

*Marthe se lève et se dirige vers la porte.*

LE GRAND-PÈRE<sup>92</sup>

150 Reste, Marthe ! J'y vais<sup>93</sup>.

MARTHE

Fais-la descendre vite.

---

83. Oh rien, je pense.

84. Mais elle est très sensible ; ton retour l'a troublée.

85. peut-être,

86. la gâte ; mais

87. rire ; — puis

88. Tu vois, pour

89. — Depuis sa maladie

90. Chacun dans la maison semble ne vivre que pour elle.

91. Et c'est moi qu'elle craint ! — Pauvre petite !

92. LE VIEILLARD

93. Reste, Marthe ! — J'y vais...

SCÈNE TROISIÈME<sup>94</sup>

*Adagio*<sup>95</sup>.

MARTHE, HORACE<sup>96</sup>.

*Marthe s'est rassise*<sup>97</sup>. *Horace est à ses pieds comme un enfant. Ils retent quelque temps sans parler.*

HORACE

Vous ne dites plus rien ?

MARTHE

Dans un hymne d'amour plus doux que des paroles  
J'entends mon cœur qui pleure et qui vers toi s'envole.

HORACE

155 O ! Marthe, mon amie<sup>98</sup>

La paix descend enfin sur mon âme ravie...  
Du songe fabuleux dont je fus longtemps ivre  
Voici que je m'éveille et que je vais revivre<sup>99</sup>.  
Oubliant les trois ans loin de vous écoulés,

160 Je reprends notre amour comme on reprend un livre

À la page où l'on est resté.  
Livre à peine entr'ouvert ; livre de notre vie,  
Dont l'amour a doré les feuillets.

Marthe, t'en souviens-tu ? Dès la première page,

165 Aussi loin<sup>100</sup> que j'y lis, je revois ton image

---

94. FO, ThC : SCÈNE III

95. [このト書欠如]

96. MARTHE et HORACE

97. Marthe et [sic] assise, Horace

98. FO : O ! Marthe — mon amie / ThC : O ! Marthe, mon amie,

99. [ここに句読点なし]

100. 162-164 : Livre charmant... livre charmant de notre vie... / Marthe,  
t'en souviens-tu ? Dès les premières pages / Notre amour en a doré les

- Me sourire au fond du passé<sup>101</sup>.  
 Je revois les grands yeux de la petite fille  
 Dont le regard partout me suivait  
 Comme s'il cherchait son reflet
- 170 Apaisé dans le cœur de l'enfant que j'étais<sup>102</sup>.  
 Marthe ! te souviens-tu, comme nous étions sages<sup>103</sup> ?  
 Toi dans ta robe bleue et blanche<sup>104</sup>  
 Moi dans ma veste du dimanche  
 Que nous avions peur d'abîmer...
- 175 Marthe ! Te souviens-tu<sup>105</sup> de tes premières larmes  
 Quand, un soir<sup>106</sup> que grand-père eut conté<sup>107</sup> son naufrage,  
 Je t'ai dit : moi aussi, bientôt, je partirai<sup>108</sup>.  
 Et tu voulus qu'avant, par notre mariage<sup>109</sup>,  
 Un lien plus puissant sût à toi m'attacher.
- 180 Ah ! tu vois qu'on revient des plus lointains rivages<sup>110</sup> !  
 Quand un amour vous guide et qu'on porte en son cœur  
 Un souvenir plus fort que tout nouveau bonheur.  
 Marthe ! Je m'en souviens, c'est cette robe grise  
 Que tu portais le jour où je t'ai dit adieu.
- 185 Est-il vrai que, depuis, tu ne l'as plus remise ?  
 Pourquoi ne dis-tu rien<sup>111</sup> ?

---

feuilletts.

101. du passé !  
 102. 168-170 : Dont le regard charmant, souriant et tranquille / Se réflétait  
 au cœur du petit garçon que j'étais.  
 103. sages !  
 104. et blanche,  
 105. Marthe ! te souviens-tu  
 106. Quand un soir  
 107. eût conté  
 108. je partirai,  
 109. [ここに句読点なし]  
 110. des plus lointains plages !  
 111. 185-186 : Dis ! c'est pour moi que tu l'as mise ? / Chère Marthe adorée...

MARTHE

Tu parais soucieux<sup>112</sup>?...

HORACE

Non ; mais je crains<sup>113</sup> que ce voyage

Ne m'ait rendu farouche et turbulent<sup>114</sup>,

190 Tu veilleras sur moi<sup>115</sup> comme sur un enfant...

MARTHE

Comme sur un mari, en qui mon âme espère...

Horace, lève-toi ! J'entends venir grand-père,<sup>116</sup>

Et Lucile.

SCÈNE QUATRIÈME<sup>117</sup>

*Mouvement musical plus rapide*<sup>118</sup>.

MARTHE, HORACE, LUCILE, LE GRAND-PÈRE<sup>119</sup>.

*Lucile est blottie contre le grand-père.*

HORACE

Bonsoir Lucile<sup>120</sup>.

LUCILE

Bonsoir monsieur<sup>121</sup>.

195

---

112. soucieux...?

113. Marthe... Je crains

114. Ne m'ait laissé farouche et turbulent.

115. Vous veillerez sur moi

116. [ここに改行なし, 後続は小文字で開始]

117. FO, ThC : SCÈNE IV / [FOではこの下にさらに] LES PRÉCÉDENTS,  
plus LUCILE blottie contre grand-père.

118. FO : *Mouvement beaucoup plus rapide.* / [ThCにはこのト書欠如]

119. [この行および次行ト書欠如]

120. Bonsoir, Lucile.

121. Bonsoir, monsieur.



LE GRAND-PÈRE

Monsieur !? Mais<sup>122</sup> Horace est ton frère.

HORACE

Bah ! nous serons bien vite amis.

Je vous avais fait peur ?

LUCILE

O ! non.

HORACE

200 Pourquoi n'êtes-vous pas restée dans le salon ?

*Lucile ne répond rien mais<sup>123</sup> reste blottie contre l'épaule du grand-père.*

LE GRAND-PÈRE

Ne la tourmente pas. Laisse-la, cher Horace.

Il est déjà très tard, et je crois qu'elle est lasse.

LUCILE

*brusquement, tandis que la servante a apporté le thé et que Marthe, dans le fond de la scène, l'apprête*

Qu'est-ce que vous m'avez rapporté de là-bas ?

LE GRAND-PÈRE

La petite effrontée ! On croit qu'elle est timide...

HORACE

205 Demain, j'espère, arriveront mes malles.

LUCILE

O ! nous<sup>124</sup> les ouvrirons ensemble, n'est-ce pas ?

*Ils se reculent un peu.*

MARTHE

*à la bonne qui l'aidait*

C'est bien, Rose ! Vous pouvez vous coucher. Il est tard.

HORACE

*à demi-voix*

---

122. Monsieur ? Mais

123. *Lucile ne répond rien, mais*

124. Oh ! Nous

À chaque objet je vous conterai<sup>125</sup> son histoire...

*la musique couvre parfois la voix*<sup>126</sup>

J'ai rapporté pour vous dans une étroite cage<sup>127</sup>

210 Un petit écureuil des îles jaune et noir<sup>128</sup>...

MARTHE

Venez prendre le thé.

LUCILE

Quand pourrai-je le voir<sup>129</sup> ?

Où l'avez-vous laissé...

LE GRAND-PÈRE

Allons, venez. Venez<sup>130</sup> !

*FIN DU PREMIER ACTE*<sup>131</sup>

*La toile tombe au moment où ils se disposent autour de  
la table de thé.*<sup>132</sup>

---

125. je vous raconterai

126. *La musique couvre parfois la voix.*

127. dans une petite cage

128. Un écureuil des îles — il est tout noir...

129. Que je voudrais le voir !

130. Allons, venez, venez ! / *RIDEAU*

131. [FO, ThCともにこの記述欠如]

132. [この卜書, FOには欠如] / [ThCではこの下に] *RIDEAU*